様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０３５６９

研究課題名（和文）日本における金融機関の連続性と革新性に関する研究

研究課題名（英文）Study on continuity and innovativeness of financial institutions in Japan

研究代表者
粕谷　誠（Kasuya, Makoto）

東京大学・大学院経済学研究科（経済学部）・教授

研究者番号：４０２１１８４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）： 19世紀の前半の大阪には200程度の両替商が存在していたが，新規参入と退出はかなり激しく，1867年に存在していた164の両替商のうち，3分の1程度が1850年以降に創業されたと推定され，18世紀から続くものは，5分の1でしかなかった。1897年までに大阪で創業された銀行54行のうち両替商の起源をもつものは18と3分の1程度であった。古くから続いた両替商が近代的銀行になった例は多くないことが確かめられた。

研究成果の概要（英文）：There were about 200 ryogae-sho (exchange house) in Osaka in the first half of the 19th century. It is implicitly thought that their business was stable because they had a cartel (nakama) and faced less intense competition than in the modern era. Case studies on the Houses of Konoike and Mitsui, which began their business in the 17th century have contributed to build up this this image. In reality, however, new entrance to and exit from this business were common. Out of 164 ryogae-sho in Osaka in 1867 one-third of them began their business after 1850 and only one-fifth of them had started their business in the 18th century or earlier. Their average or median time of existence was not so long.
On the other hand, out of 54 banks that were established in Osaka by 1897, presidents of 18 banks were former ryogae-sho or their descendants. There few banks that had long tradition from ryogae-sho in the Edo era and many banks that were newly established in the Meiji era.

研究分野： 日本経営史

キーワード： 両替商　銀行　連続性　国際業務　大阪

１．研究開始当初の背景

両替商の研究は，鴻池家および三井家に代表される経営史料が多数残っている商家を中心にケース分析がおこなわれてきた（安岡重明（1970）『財閥形成史の研究』ミネルヴァ書房および賀川隆行（1985）『近世三井経営史の研究』吉川弘文館など）。近年になって中川すがねによって，大坂における両替商の総数が経年的に明らかにされたが（中川すがね（2003）『大坂両替商の金融と社会』清文堂），それ以上の分析はおこなわれなかった。長く続いた両替商の経営が安定していたことから，明示的ではないが，両替商の経営は安定していたとのイメージが抱かれるようになった。

これに対して山口家・安田家など幕末期に両替商としてスタートした両替商があることが知られていたが，近代の研究者が研究対象とすることもあり，両替商というより近代に勃興する多くの銀行のうち，明治維新より若干早くスタートしたものというイメージを持たれていたといえる。

石井寛治は江戸時代末期から明治初期における両替商金融を分析し（石井寛治（2007）『経済発展と両替商金融』有斐閣），両替商金融が明治以降に果たした役割を検討した。これは重要な業績であるが，やはりケース研究で，どの程度の代表性があるのかは，明らかではなかった。また逸身・吉田らによる両替商銭屋の実証研究（逸身喜一郎・吉田伸之編（2014）『両替商　銭屋佐兵衛　１・２』東京大学出版会）は，中規模クラスの進行両替商の経営を一次資料にもとづいて明らかにした画期的な研究であったが，やはりケース研究であった。

史料が残っている両替商を分析対象とすれば，経営が生き残ったものを対象とするしかないわけで，そこにはサバイバル・バイアスが働くことになる。江戸時代の両替商はどのくらい継続性があり，どのくらい明治の銀行家になったのか，それは銀行のなかでどのくらいの割合を占めているのかは，明らかではなかったのである。

２．研究の目的

本研究は，このようなサバイバル・バイアスによるイメージの偏りを若干なりとも修正することを意図した。そして江戸時代の両替商をより全体的に分析の対象とし，どのくらい経営の浮沈があったのかを明らかにしていくことを第一の目的とした。そしてこうした両替商がどの程度，近代の金融機関に転化していったのか，また明治期に設立された銀行のうち，どのくらいの銀行が両替商を出自に持っているのかを明らかにすることを第二の目的とした。

そのうえで，近代以降において，両替商を出自に持っていたことがその後の銀行の生存に有利であったかを明らかにすることを第 3 の目的とした。

さらに両替商を出自に持つ銀行と持たない銀行で生存や業務の差があったのかを明らかにしていくことを第 4 の目的として，両替商を出自にもつ銀行として三井銀行・住友銀行，両替商を出自にもたない銀行として三菱銀行を取り上げ，業務を比較していくこととした。

３．研究の方法

まず江戸時代の両替商を全体としてとらえる資料として，大阪で刊行されていた両替商一覧を使用することとした。これらは 19 世紀になって刊行されたものが残されているのみで，残念ながら 18 世紀を研究対象とすることができないが，やむを得ないものとした。適当なインターバルをもった両替商名簿を作成し，ある時点と次の時点の名簿を比較する。そしてある両替商が，双方の時点に存在していればその両替商が生き残ったと判断でき，前の時点にしか存在していなければ，その両替商が 2 時点間に退出したと判断でき，後の時点にしか存在していなければ，その両替商が 2 時点間に新規に参入したと判断することとした。これをいくつかの時点に適用していけば，両替商の新規参入・退出の度合いが，19 世紀の前半について明らかにできる。両替商一覧が存在する年が限られているので，1799 年，1809 年，1828 年，1837 年，1849 年，1857 年，1867 年を対象とした。1810 年代の一覧が欠けているが，他はほぼ 10 年おきに利用できることになる。

続いて明治期に設立された銀行のうち，経営者が両替商（またはその子孫）であれば，両替商の起源をもつものと判断する。明治期に設立された銀行のうち，どの程度が両替商の起源をもつのかを明らかにする。銀行の新設がほぼ終了する 1897 年について，大阪で設立された銀行を対象とするが，比較の対象として東京も同様の分析をおこなうこととした。

そしてこれらの銀行がのちの時代にどの程度継続していったのかを明らかにする。両替商起源のある銀行とない銀行で，生存率に差があるのかないのかを明らかにしていく。合併により両替商を営んでいた家の経営権が失われれば，消滅したと解釈し，他行を合併しても経営権が失われなければ，生存していると解釈した。

さらに両替商起源をもつ銀行として三井銀行と住友銀行をあげ，これらがどのような業務に強みを持っているのかを明らかにし，さらに両替商起源をもたない三菱銀行と比較してどのような違いがあるのかを明らかにしていく。

４．研究成果

1867 年に大阪に存在していた 164 の両替商を，両替商一覧への初出年で整理すると，1799 年 33，1809 年 8，1828 年 29，1837 年 12，1849 年 29，1857 年 13，1867 年 40 であ

った。1867 年という江戸時代最後の年に存在していた両替商のうちの 3 分の 1 が 19 世紀後半の創業であったことになり，創業 25 年以下の新しいものであったことが明らかとなった。山口家などがここに含まれることになるが，決して例外的な存在ではなかったといえる。逆に 18 世紀以前から続いていた両替商は 5 分の 1 に過ぎなかったのであり，先の山口などの「新興」の両替商と比較すれば，少数派であったことになる。三井家や鴻池家など 17 世紀から続く両替商は，さらに少数派であったことになり，むしろ例外的な存在であったといえる。1744 年に創業した銭屋佐兵衛両替店は，三井や鴻池と比較すれば「新興」であるが，1867 年という時点で見れば，「老舗」というにふさわしい存在であったといえる。

1897 年までに大阪で設立された銀行 54 行のうち両替商に起源のある銀行は 18 行であり，その比率は 3 分の 1 であった。この比率が高いのか，低いのかを評価するのは基準が必要であるので，同様な数値を東京についてみると，68 行のうち 9 行となり，1 割余りとなる。江戸時代に両替商が高度に発達していた大阪のほうが，東京よりも比率が圧倒的に高かったことが確かめられたことになる。ただし江戸では，金銀両替を行う本両替の数が極端に少なく，非常に多くの銭両替が存在しており，彼らは商売を兼業することが多く（安田などもここに含まれる），江戸時代の主業が両替商としてとらえられておらず，調査が十分に行き届いていない可能性もあることには注意が必要である。そうした留保をつけたうえで，日本の銀行発展に果たした両替商の役割を過大評価できないという結論を出しておくこととする。

第三に銀行の生存についてみていく。大阪では両替商起源のある 18 行のうち 1933 年に生き残っていたのは 2 行（大阪貯蓄銀行，住友銀行）であり，起源のない銀行は 36 行のうち 1 行が生き残った。東京では両替商起源のある 9 行のうち 2 行（三井銀行，安田銀行）が生き残り，起源のない銀行 64 行のうち 9 行が生き残った。両市を合計すると，両替商起源のある銀行は 27 行中 4 行が生き残り，残存率 14.8%であるのに対し，両替商起源のない銀行は，100 行中 10 行が生き残り，残存率は 10.0%であった。したがって両替商起源があるかないかによって生き残りに大きな差がないことが分かった。

両替商起源のある銀行として，三井銀行と住友銀行をみると，戦間期には預金・貸金とともに証券・国際業務で非常に強みがあることが確認される。買為替額を 1928 年から 1932 年の平均でみると，三井 5809 万円，住友 1951 万円，三菱 1342 万円であるのに対し，安田は 585 万円，第一は 256 万円であった。また社債引受額は，三井 6341 万円，住友 2068 万円，三菱 2756 万円，安田 2544 万円，第一 1745 万円であった。三井と住友の優位は，外国業務で特に顕著であったことが分かる。そこで両替商起源のない三菱銀行を加えて，3 行の国際業務を考察してみることとする。まず 3 行の取り扱い外国為替の平均額を比較してみると，圧倒的に三井と三菱が大きく，住友は小さい。三井銀行と三菱銀行の大口顧客を対象とする点で共通性があり，住友銀行は中小顧客を対象としていたことが推定される。これは三井と三菱がそれぞれ三井物産と三菱商事という日本を代表する商社を同じ系列内に持ち，それらの為替を扱っていたのに対し，住友が系列内に商社を持たず，戦間期には銅の輸出も減少することから，大口の貿易取引ができない一方で，アメリカの西海岸やハワイに店舗もしくは現地法人を持ち，日本人移民の送金業務を行っていたことが，平均額を小さくしたためであると推定される。両替商起源と顧客基盤にあまり関係がないことが分かった。

次に国際部門の人材養成について比較することとするが，住友銀行の人材養成については不明なので，三菱銀行と三井銀行を比較する。両行とも預金・貸出など各人が経験する業務に特化が見られるが，それほど強いものではなく，その意味では，スペシャリストの養成というよりは，ゼネラリストの養成であったといえる。これは支店の人員配置を本部人事部ではなく，支店長が決定していたことにもよるといえる。これに対して国際部門については，三菱銀行と三井銀行は，国際業務に特化した人員を育成しており，国際部門だけはスペシャリスト的な養成が行われていた点では共通する。この点も両替商起源のある，なしに大きな影響を受けてはいないことが示唆されるといえる。

最後に補足として，明治期とくに明治 20 年代に見られた日本銀行借用金依存からの自立についてみてみる。大銀行は 1900 年恐慌以降，日本銀行借入金から自立していく点で共通するが，三菱銀行は明治期から大正期にかけて，三井銀行よりも日本銀行借入金に依存する度合いの高かったことが明らかとなった。両替商起源のある，なしと関連していたのかもしれないが，この点についても住友銀行について明らかにすることができず，より詳細な分析は今後の課題として残されている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）

①<u>粕谷誠</u>，戦前期三菱銀行の外国為替業務，三菱史料館論集，査読なし，第 19 号，2018，pp.1－14。
②<u>粕谷誠</u>，戦前期三菱銀行の職員養成と銀行合同，三菱史料館論集，査読なし，第 18 号，2017，pp.89-108。
③<u>粕谷誠</u>，戦前期三菱銀行の資金循環，三菱

史料館論集，査読なし，第 17 号，2016，pp.35-49。
④ Makoto Kasuya，“Japanese Banks in Chinese Settlements before the Second World War”，*The Journal of Northeast Asian History*，Vol. 13，No. 1，2016，pp. 107-141.
⑤ Hannah Leslie and Makoto Kasuya，“Twentieth-Century Enterprise Forms: Japan in Comparative Perspective，” *Enterprise and Society*，Vol. 17，No.1，2016，pp. 80-115

〔学会発表〕（計　2 件）
①粕谷誠，戦前期日本の多国籍銀行，地方金融史研究会，2016 年 11 月。
②粕谷誠，戦前期三菱銀行の外国為替業務，地方金融史研究会，2018 年 1 月。

〔図書〕（計　1 件）
① Makoto Kasuya，“Avoiding Excessive Risks and Investing in Inimitable Competence in the International and Securities Businesses，” in Michael Lescure ed.，*Immortal Banks: Strategies, Structures and Performances of Major Banks*. Geneve: Librairie Droz,2016，pp.49-70.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
粕谷　誠　　（KASUYA，Makoto）
東京大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：40211841

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）